

ミュンヘン駅頭の怪

— 横山又次郎とエリーゼ —

林 尚孝

エリーゼ・ヴィーゲルトは、これまでベルリンの出身であると信じられてきた。筆者はこの定説に疑問をいだき、彼女はミュンヘンの「舞師」であると推論し、『通信』一六一号および「鷗外」八三号において、その根拠を述べた。本稿は「独逸日記」を検討した結果、鷗外がミュンヘンを去るとき、駅頭に見送りに来たのは、日記に明記されている横山又次郎だけではなく、エリーゼもいたに相違ないことを推論するものである。

「独逸日記」一八八七（明治二〇）年四月十五日の項は、以下に示すように、同じ日付で二つの記述が別個に記されている。

十五日。午前中浜に逢ふ。別を告ぐ。
萬里離家一笈。郷人相遇若為情。

今朝告別僧都酒。泣向春風落羽城。
又別に臨みて詩を舞師某の筆跡帖に題す。

踏舞歌應囑

雕堂平若鏡。電燈燦放光。（中略）

午後六時五十分汽車民願府を發す。

十五日。民願府を發し、普國伯林府に赴く。ロオベルト、ロッホ Robert Koch に從ひて細有機物學を修めんと欲するなり。發車場に來たりて余を送る者を横山又二郎と為す。他人は余が發程の時刻を知らず。蓋し国内を往返するに必ず之を送迎

するは素と無益に屬す。余故に諸人に報ぜず。（後略）

この二つの記述は紛らわしいので、漢詩の書かれたものを日記（一）、後の方を日記（二）として区別することにする。

日記（一）の記述には、いくつか不自然なところがある。「無益」と言いつつ、なぜ横山だけに立出を知らせたのか。午前、中浜に逢いながら、なぜ彼には出発時刻を知らせなかったのか。「必ず之を送迎するは素と無益に屬す」という「言い訳」を、ことさら書いたのは何故か。

これらの謎を解くために、まず、中浜、横山との交友関係について見ておこう。

中浜東一郎（一八五七—一九三七）は、東大医学部の同級生であり、かのジョン萬次郎の長男である。卒業席次は、森が八番、中浜は三番であった。ミュンヘン大学では、鷗外とともにベッテンコーフェル衛生学教授の下で学んでいる。

ミュンヘンでは、鷗外、中浜のほか浜田玄達、岩佐新ら東大医学部出身者四人がグループをなしていたことは、「独逸日記」の四月の条からも明らかである。

五日。午後浜田、中浜、岩佐とグロオスヘッセルロオへに至る。

十一日。中浜、浜田、岩佐とスタルンベル湖に遊ぶ。

十五日。午前中浜に逢ふ。別を告ぐ。
一方、名前を又二郎と誤記している事実が

示唆するように、横山とは前年八月三〇日、知り合ったばかりの仲である。

二十日（略）夜王国骨喜店 Cafe Royal に至る。一邦人に逢ふ。横山又二郎と曰ふ。

此に來て地底古物学 Palaeontologie を修むとぞ。瘦小にして色黒し。洋服にて日本風の礼を行ひ、隣席の人々を驚かしたり。

横山又次郎（一八六〇—一九四〇）は、東京大学理学部を卒業した古生物学者である。ナウマンの指導のもと南アルプスの地質調査を行ったのち、一八八六年ミュンヘン大学に留学、チツテル教授の下で学んでいた。一八八九年に帰国、すぐに東大の初代古生物学教授となつている。

横山の名前が次に「独逸日記」に現れるのは、一月一日で「横山子來り訪ふ。この人は依然日本風なり」と記している。この日の記述には「午前零時加藤、岩佐、中浜及び浜田の四氏と英骨喜店 Cafe Anglars の舞踏会に在りて、「プンシユ」酒 Punsch の盃を挙げ、新年を祝す」とも記されており、横山との交際は中浜らのグループとは別であることがわかる。

この横山の名は、ミュンヘン駅見送りの二週間前の四月二日、さらにその一週間前の三月二五日にも出てくる。注目されるのは、四月二日の条である。

四月二日。横山又二郎と劇を鞞下戲園に觀る。男児のみにては余りに興なければとて、ファンニイ Fanny Grosshauser と云ふ少女を伴ふこと、なれり。

この記述には不自然な点がある。ファンニイのあとにドイツ語でその姓名を書いているので、「独逸日記」の記入例からみて初対面である可能性が高い。だが、女性が初対面の男性二人と観劇に出かけることはとても考えられない。彼女をよく知る女性Xが間にたち四人で観劇したとみるのが自然である。この女性Xが横山の知人であるなら、鷗外は四人で観劇したと書くはずで、Xは鷗外の知人であったと推測される。不自然な記述は女性Xの影を消し去ったために生じたものに相違ない。

さらに、三月二十五日の「独逸日記」にも不自然な点がある。

二十五日。横山又二郎とヒルトHiltを訪ふ。この人財巨万を累ぬ。所謂東洋癖ありて、好みて日域の骨董畫畫を聚む。(略)日本の刀槍甲冑を以て壁を飾る具と為す。

奇と謂ふべし。一女客柄鏡Loggnetteを手にし、嬌声を発して曰く。美なる哉。此の如き粧飾は天才あるにあらでは成就せざるべしと。余を以て之を觀ればたゞ錢の

み。何ぞ天才を要せん。

この条にも、不審な箇所がある。それは「女客」とのみ記し、その名を伏せていることである。この女性は日本製の柄鏡に興味を示し、日本人の才能を高く評価している。ヒルト邸で出会ったこの「女客」は、横山とも顔をあわせており、四月二日にファンニイ嬢とともに観劇に参加したであろう女性Xの蓋然性が大である。

四月一五日のミュンヘン駅頭に話をもどす。中浜と別れた後で、鷗外は「舞師某」に漢詩「踏舞歌心囑」を贈っている。時間は特定出来ないが、鷗外は「舞師某」とも逢って、別れを告げているのである。このエリーゼと推定される女性が、発車場に見送りに来るのは、自然な流れであろう。以上は、日記(二)にその名はなくても、エリーゼがミュンヘン駅頭に来たと推測する第一の理由である。

第二に、「独逸日記」三月二十五日のヒルト邸訪問、四月二日の観劇、四月一五日のミュンヘン出立の記述には、いずれも不自然なところがある。だが、この問題は、鷗外、横山、エ

リーゼが行動をともしにしていたと考えれば説明がつく。また、そう考えなければ、一連の事実が自然な流れとして理解できないのである。

その三、以上、指摘した「独逸日記」の不自然な記述は、鷗外が、エリーゼの影を消すための作為に起因すると考えて、はじめて納得できる。

鷗外が、横山にだけ出立を知らせた理由は、日本人仲間のうちで、彼だけがエリーゼを知っていたからである。より親しい友人たちに出発時間を知らせなかつたのは、エリーゼとの仲がよほど深いものになっており、彼女の存在を仲間知られたくなかつたからである。一方、横山に知らせたのは、もしも駅頭で、他の日本人がエリーゼを見かけたとしても、横山と連れだつていけば、余計な詮索を免れうると考えたからではないか。

【追記】「独逸日記」の不自然な記述から、エリーゼの影を消去した鷗外の作為を発見したのは、共同研究者の小平克である。

森鸥外纪念馆通信

No.165 冬

編集後記

日曜日になると、寒い中、多くの人が観潮楼址の庭を訪れます。「福岡から来ました。お庭を拝見できて幸せです」「京都から来ました。休館中で残念です。庭が見られたのでよしとしますか。」(ノートより)。

そんなある日、仏人の青年がぼんやりと庭を見つめていました。仏系のコンサルタント会社に勤めているのだそうです。パリ大学時代に、翻訳で「青年」「雁」「キタ・セクスアリス」「山椒大夫」を読み、日本の明治という時代に興味を持つようになったのだそうです。日本で仕事をしながら、日本の社会や文化について、そして鷗外を生んだ明治という時代について勉強したいと思い、日本に来たのだ—そんなことを話してくれました。記念室が休館して一年。時折、訪ねてくださる会員の方々や、こういった人たちに支えられながら、団子坂に春の陽射しが帰って来るのを心待ちにしている今日この頃です。

(倉本幸弘)

森鷗外記念会通信 No. 165

発行 平成二十一年一月三〇日

(年四回発行・四・七・一〇・一月発行予定)

編集責任者 倉本幸弘

発行所 森鷗外記念会

郵便番号・一一三—〇〇二二

東京都文京区千駄木一一三—四

電話・〇三—五八三四—〇一五六